



仁淀川に関わる後継者を育てたい

仁淀川流域の山、川、海的环境保全推進協議会

仁淀川について

仁淀川は、愛媛県にある西日本最高峰の石鎚山に発し、愛媛県3市町村、高知県7市町村を貫き、土佐湾へと注ぐ一級河川である。

幹川流路延長は124 km、吉野川、四万十川に次ぐ四国で3番目に長い川である。

川の水は、全国の水質ランキングで1位を獲得するほど澄んでおり、「仁淀ブルー」として名を馳せる。



仁淀川の現状 - 中・下流域 -

『仁淀川流域の山、川、海的环境保全推進協議会』（以降、組織と称す）は、高知県中部に位置する土佐市にあり、仁淀川河口部から上流約10 kmの中・下流域で活動を展開する。

仁淀川の中・下流域を代表する魚は『アユ』。川では、かつてアユ漁が盛んに行われ、最盛期の昭和53年に年間476 tの水揚げがあった。しかし、その後、ダムをはじめとする河川開発や流域の環境変化によって、漁獲量は年々減少。最近では100 tを切るまでになっている。また、アユだけでなく、ウナギを始めとする他の在来魚も数を減らしている。

加えて、社会基盤の整備や生活環境の変化にともない、川と関わりを持つ住民が減少し、その保全に係る意識も薄れている。特に子どもたちの川と触れあう機会が少なくなっており、河川環境・生態系や景観の保全に係る意識や流域の水文化の継承が大きな課題となっている。

組織の設立と活動の目的・方針

組織は、将来の①仁淀川の環境や生態系、②流域住民の川とのかかわり方に危機感を抱いた仁淀川漁協の組合員が主体となって、平成25年度に設立した。

現在の組織体制は、漁業者+漁協+市民グループで構成し、自治体（教育委員会含む）や小学校、県内の環境保全に係る民間会社の協力を得ながら取り組みを進めている。

活動の目的は、①アユを主体とする魚介類の生息環境の維持保全、②次世代を担う子どもたちの川に対する意識の啓発及び川に関わる人材育成であり、現在、以下の活動方針で取り組みを展開している。



●活動方針

① アユ産卵場等を保全する ヨシの刈り取り
仁淀川の主要なアユ産卵場周辺の中州に広がるヨシ帯の拡大による陸地化で、流れや河床材料が変化し、アユの再生産に支障をきたしている。そこでヨシの分布が広がらないように刈り取りを行い、産卵場の維持保全を図る。

② 川に対する意識の啓発・人材育成 体験学習
子どもたちに河川清掃を兼ねた体験型学習を実施し、川を大切にする気持ち、川の楽しさ・魅力を伝え、その保全に対する意識を啓発し、川に関わる人材を育成する。

豊かな川の保全とそれに係る人を育てるために

(1) ヨシを刈り取り、アユの産卵場を維持保全する

活動範囲には主要なアユの産卵場がある。その中州に広がるヨシが、最近、分布域を拡大し、陸地化を進行させている。

陸地化の進行は、産卵場における流速や河床材料の変化を招き、アユの再生産に悪影響を与える恐れがある。そこで、ヨシの分布域が広がらないように、毎年刈り取りを行い産卵場の維持保全を図っている。

刈り取りは、秋季に実施。作業は、刈り払い機を用いて行う。刈り取ったヨシは、河原に集積し、適度に乾燥させ野焼きする。野焼きは、関係機関に申請書を提出し、許可を得て適切に実施している。



(2) 体験学習を通じて保全の心とその技術を教える

仁淀川の保全に対する意識の啓発と川に関わる人材育成を目的に、体験学習会を開催している。

学習会は、土佐市内の小学校中・高学年を対象に、地元の環境保全に係る民間会社の職員を招いて実施する。

学習会では、①河川環境や景観保全の意識を啓発するための清掃活動、②仁淀川の環境や生き物などに関する座学、③川の保全を学ぶための水質調査及び水生生物調査の体験を行っている。

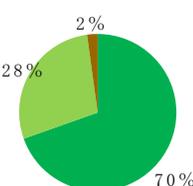


活動の効果と今後の方針

これまでの取り組みの結果、アユ産卵場の維持保全については、刈り取り後の翌春に再びヨシが芽吹きすくすくと育ってはいけるが、その拡大は抑止できている。また、瀬の浮き石を好むカワゲラ類やヒラタカゲロウの生息密度が、ここ3か年12~31個/m²の範囲で安定して推移していることから、産卵場の維持保全が図れていると評価できる。

川に対する意識の啓発・人材育成については、『今後、仁淀川を守っていくことや水生生物について学びたい』とする児童が3か年のアンケート集計で9割を超えたことから、学習会の効果がうかがえた。

仁淀川は、地域住民にとって身近な自然環境であり、その保全はみんなで考えるもの。今後も活動を継続し、豊かな川とその保全の心を継承したい。



今後、仁淀川を守っていくことや水生生物について学びたいか？

- 非常に学びたい
- 学びたい
- 学びたくない

